

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

訪問調査：その整理と分析

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 和田, 正平, 江口, 一久 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001616

3 訪問調査—その整理と分析—

- | | |
|-----------------|---------------|
| 1 民族構成 | 9.5.1 昼食 |
| 1.1 村の構成員 | 9.5.2 夕食 |
| 1.2 在住年数 | 9.5.3 朝食 |
| 1.3 婚姻状況 | 9.6 飲み物 |
| 1.4 世帯の規模 | 9.7 酒類の飲用度 |
| 2 家族構成 | 9.8 飲用の酒類 |
| 2.1 世帯主の性別と年齢 | 9.9 特別料理 |
| 2.2 人口の構成比 | 9.10 特別な日 |
| 2.3 家族構成 | 10 衛生状況 |
| 3 教育 | 10.1 便所の有無 |
| 4 言語 | 10.2 用便後の手洗い |
| 5 職業構成 | 10.3 下痢症の頻度 |
| 5.1 主たる職業 | 11 近代化の状況 |
| 5.2 副業 | 11.1 移動と運搬の手段 |
| 6 農業経営の規模 | 11.2 時計 |
| 6.1 経営面積 | 11.3 ラジオ |
| 6.2 栽培作物 | 11.4 テープレコーダー |
| 7 食用動物 | 12 宗教 |
| 7.1 家畜の種類 | 13 疾病 |
| 7.2 食用にしている野生動物 | 14 居住と扶養 |
| 8 家計 | 14.1 扶養家族 |
| 8.1 年収 | 14.2 居住形態 |
| 8.2 現金収入の職種 | 15 食用野菜 |
| 8.3 借金 | 16 胃腸病 |
| 9 医療と飲食 | 16.1 胃腸病の治療行動 |
| 9.1 近代医療と民間医療 | 16.2 民間胃腸薬 |
| 9.2 医療費 | 17 食餌療法 |
| 9.3 医療機関 | 17.1 下痢の場合 |
| 9.4 飲料水 | 17.2 便秘の場合 |
| 9.5 食事 | |

1 民族構成

1.1 村の構成員

アコラボ村はどのような民族から構成されているのだろうか。調査にあたり、1960年のセンサスを参考にガーナを構成している民族を数えてみると、約100の民族集団がリストアップされていた。このセンサスの民族分類がどのような基準でおこなわれたのか明示されていなかったが、当時の行政府が「言語と文化」の違いを基準に民族の分類をお

こない、また、自己申請した「アイデンティティー」もエスニックな単位として採用し、若干の補正を施したと推察される。本調査においても基本的にはこのセンサスの民族分類に従い、アコロボ村全世帯数291戸の民族構成を明らかにすることにした。

まず、大単位の民族分類によりアコロボ村の民族構成の割合を見ると、

- 1) ガ・アダンベ (Ga-Adangbe) が143戸 (49.14%) で住民の約半数を占め、ついで、
- 2) アカン (Akan) が46戸 (15.80%)
- 3) グアン (Guan) が40戸 (13.74%)
- 4) エウエ (Ewe) が38戸 (13.05%)
- 5) 非ガーナ (Non-Ghana) が18戸 (6.19%)
- 6) グル (Gur) が2戸 (0.69%)
- 7) 不明4戸 (1.37%) となった。

すなわち、アコロボ村はガ・アダンベ系民族を主体に構成されており、統計的にはこれにそれぞれ10世帯に1~2世帯の割合でアカン系、グアン系、エウエ系の諸民族が混住する形をとっている。

つぎにこうした民族構成を中単位で見ると、まず、大単位でガ・アダンベと呼ばれる民族はガ (Ga) とアダンベ (Adangbe) にわかれ、アカンもまたチュイ (Twi)、ファンティ (Fante) にわかれる。アカンにはチュイ、ファンティのほかアニ・パウレ (Anyi-Bawle) ンゼマ (Nzema) という中単位の民族集団もあるが、アコロボ村の世帯主にはこの2つの民族集団は存在しなかった。グアンとエウエには中単位にあたる民族分類はなく、そのままグアンとエウエを中単位の民族集団として扱った。また、大単位では非ガーナ起源として一括された民族集団は20世紀になって近隣諸国からこの村に移住してきた人々で、民族名をあげると、ハウサ (Hausa)、モレ・ダグバネ (Mole-Dagbane) そのほとんどがモシ (Mossi) で、ソングイ (Songhai) フラニ (Fulani) と続く。ソングイの中にジェルマ (Djerma) が含まれる。グルはガーナ北部の部族で中単位の民族集団としては10数集団があげられるが、アコロボ村に在住しているのはグルシ (Grusi) のみである。以上中単位で見るとアコロボ村の民族構成は、1) アダンベ125戸 (42.95%)、2) チュイ40戸 (13.74%)、3) グアン40戸 (13.74%)、4) エウエ38戸 (13.05%)、5) ガ18戸 (6.18%)、6) ハウサ9戸 (3.09%)、7) ファンティ6戸 (2.06%)、8) モレ・ダグバネ5戸 (1.71%)、9) ソングイ2戸 (0.68%)、10) フラニ2戸 (0.68%)、11) グルシ2戸 (0.68%)、12) 不明4戸 (1.37%) となる。

つまり、アダンベがもっとも多く (42.95%)、チュイがこれに続き (13.74%) 両者で過半数 (56.6%) を占めている。

さらに、小単位で民族構成を見ると、アダンベの中では1) シャイ (Shai) が112戸 (38.49%) でもっとも多く、2) クロボ (Krobo) 9戸 (3.09%)、3) アダ (Ada) 4戸 (0.68%) は少数である。エウエは民族学的にはアンロ (Anlo) とクレペ (Krepe) にわかれるが、

ガーナのセンサスでは下位分類されていないので、小単位ではシャイにつぐ多数派の民族集団になる。以下、小単位で見ると、グアン系ではラルテ (Larte) が26戸 (8.93%)、ガ系ではガ (Ga) が18戸 (6.18%)、チュイ系ではアクアペン (Akuapem) が17戸 (5.84%) とアサンテ (Ashate) 11戸 (3.78%) が多く、順次戸数は少なくなるが、クロボ (Krobo) 9戸 (3.09%)、ハウサ (Hausa) 9戸 (3.09%)、クワウ (Kwawu) 6戸 (2.06%)、モシ (Mossi) 5戸 (1.71%)、アヌム・ボソ (Anum-Boso) 5戸 (1.71%)、クラチ (Krachi) 5戸 (1.71%)、ファンティ (Fanti) 4戸 (1.37%)、アダ (Ada) 4戸 (1.37%) となる。ファンティは中単位では6戸であるが、小単位ではファンティ4戸とアゴナ (Agona) 2戸にわかれる。2戸以下はジェルマ (Djerma)、フラニ (Fulani)、アクワム (Akwamu)、ボラン、ワサ (Wasa)、グルシ (Grusi) で、不明が4戸である。つまり、小単位の民族分類を基準にすると、アコラボ村は21の民族から構成されていることになる。

1.2 在住年数

村の草分けについてはすでに述べたが、現在、この村を構成している世帯主291人の来住歴を知るために、村に住みはじめてどのくらい経ったのか尋ねてみた。この質問 (Q3) に対して10年以上20年未満が95戸 (32.64%) で3割強を占めもっとも多いが、これは10年刻みで集計したため、実は20年以上の長きにわたってこの村に住んでいる世帯主は174個 (57.79%) にのぼり、6割近くがこの村に根を下ろして住んでいることになる。それに比べ、この村で生活をはじめて1年未満の世帯は8戸 (2.74%) できわめて少ない。つまりこの村はもはや他から流入して戸数が増加する時代は終わったようである。

1.3 婚姻状況

世帯主が既婚か独身 (シングル) かについて質問 (Q4) をおこなった。その結果、既婚世帯が192戸 (65.95%)、独身世帯が32戸 (10.99%) の割合になった。また、結婚したが、目下離婚して夫ないし妻がない世帯が30戸 (10.30%)、夫と死別した寡婦の世帯が20戸 (6.87%)、その他未婚だが同棲している世帯が6戸 (2.06%)、また、離婚していないが別居している世帯が2戸 (0.68%) である。「わからない」という回答が9世帯 (3.09%) あるが、これは、何らかの理由で回答を拒否したものと思われる。

ひきつづき単婚か複婚かを尋ねた (Q5)。単婚 (一夫一妻) が123戸 (42.26%) である。のちに述べるように、キリスト教信者の割合が比較的高い村なので単婚が多数を占めるのは当然であるが、複婚 (一夫多妻) が28戸 (9.62%) もある。

また、注目されるのは、世帯主が女性で、夫がいると回答したものが6戸 (2.06%) あることで、これはたぶん、夫は居候のような存在で婿入りした形になったと推測される。次に、夫も妻もない独身者が29戸 (9.96%) あり、この回答はその前の質問で、独身と回答した世帯主31戸 (10.99%) と数が一致しないが、無回答が105戸 (36.08%) もあるの

で、たぶん、独身者に夫や妻の数を尋ねたので、この質問では無回答にまわったと推察される。

質問6では既婚者（192世帯）に対して「いつ結婚したか」という追加質問をおこなった。この場合、前問（Q4）で独身（32世帯）、同棲（6世帯）等と回答したものは無回答（97世帯）になるが、すでに質問4で婚姻状態を尋ねたとき「わからない」（9世帯）と回答したものがあり、さらに離婚したもの（30世帯）に結婚年を尋ねても、不快感を表明するものもあり、この問いに対する回答は強制しなかったので、無回答者が3割を超えたと考えられる。

さて、結婚年を回答した194世帯について「結婚して何年たったか」という結婚年数に関する質問をおこなった。この村には複婚世帯があるので、回答は若干複雑になる。すなわち、最初の妻（単婚者は妻は1人だが、複婚者は妻の数それぞれについての結婚年がある）と結婚して1年から5年たった世帯が41戸（21.13%）、6年から10年たった世帯が40戸（20.62%）、と結婚してから1年以上10年たった世帯が4割をこえ、この村は結婚年が浅い若夫婦が多いのがわかる。以下、11年から15年間で27戸（13.92%）、16年から20年間で18戸（9.28%）、21年から25年間で23戸（11.86%）と続き、高齢者夫婦の世帯数はしだいに少なくなり、結婚して41年以上の世帯は8戸（4.12%）であった。

既婚世帯主のうち、複婚者27戸（13.92%）について二番目の配偶者との結婚年数を質問した。結婚して1年以上5年たった世帯が13戸（48.15%）、6年以上10年たった世帯が6戸（22.22%）となり、第2夫人（夫の場合もある）との結婚年数は10年が7割を占める。また、複婚世帯の中には配偶者を3人もってるものもあり、その数は5名（2.58%）で、4人もっているもの3名、5人もっているもの1名、6人もっているもの1名であった。4人以上の配偶者をもっているものの結婚年数はすべて8年未満で、結婚して日が浅いのがわかる。

ついで、これらの配偶者の出身民族を尋ねると（Q7a-1）、ガ・アダンベが84名（42.63%）、ついで、アカン27名（9.27%）、エウエ16名（5.49%）、グアン13名（4.46%）、非ガーナ人3名（1.03%）であった。これを中単位の民族集団で見ると、アダンベ77名（26.46%）、ハウサ54名（18.55%）、チュイ25名（8.59%）、エウエ16名（5.49%）、グアン13名（4.46%）、ガ7名（2.40%）、モレ・ダグバネ3名（1.03%）、ファンティ2名（0.68%）となる。注目されるのは、ハウサは世帯主としてはさほど多くないのに（9世帯）、配偶者となっているものは多く、ハウサの女性がこの村に流入し、結婚している事例が多いが見てとれる。

配偶者を民族的に見ると、アダンベがもっとも多いことがわかるが、それをさらに小単位で見ると、シャイ61戸（20.96%）、クロボ9戸（3.09%）、アダ3戸（1.03%）の順となり、アダンベの中のシャイが圧倒的に多い。複婚世帯の配偶者（第2夫人）を民族別に見ると、シャイ12名（4.12%）が多く、以下、エウエ3名（1.03%）、アクアベン2名（0.68%）、ハウサ2名（0.68%）の順で、アダ、ガ、アシャンティ、クワウ、ラルテが1名であった。

質問8で婚姻成立の儀礼について「慣習婚（伝統婚）」か「契約婚（宗教婚）」か、どちらで結婚したか質問をおこなった（Q8）。その結果、慣習婚が186名（63.91%）、契約婚が32名（10.99%）であった。契約婚のなかにはイスラム教徒の結婚を含んでいる。無回答が40名（13.74%）も出たのは質問が二者択一であったからとも考えられるが、慣習的にせよ宗教的にせよ、正式な儀礼手続きを経ることなしに世帯をつくったものが「どちらでもない」と回答したと推定される。

1.4 世帯の規模

1世帯の中にどれほどの人々が一緒に住んでいるのだろうか（Q9）。世帯員の数が1人と回答したものが74戸（25.42%）でもっとも多い。すでに質問8で独身と回答したものが30戸とあったので、残り44戸（15.12%）の1人世帯は、寡婦、寡男（男やもめ）、別居者などであると推定される。ついで、2人世帯と3人世帯がともに同じく37戸（12.71%）で、こうした2～3人世帯は合わせて74戸（25.42%）で、単身世帯と2～3人の少人数世帯が多いのがわかる。以下、4人世帯35戸（12.02%）、5人世帯23戸（7.90%）、6人世帯22戸（7.56%）、7人世帯23戸（7.90%）と続き、8人以上の多人数で構成されている世帯もかなりあることがわかる。8人世帯が11戸（3.78%）、9人世帯が10戸（3.43%）と続く。10人以上の構成員を含む世帯が15戸（5.15%）あり、この中には16人以上が1戸、なんと21人以上も2戸ある。世帯を構成員の数からみれば、少人数世帯が多いが、多人数で構成されている世帯には非常なばらつきがあるのがわかる。

世帯主はこうした構成員を日々食べさせているわけだが、各世帯主はどれくらいの扶養者を抱えているのがろか。「扶養する家族はいない」と回答したものは66戸（22.68%）である。世帯主が独り生活者であれば、基本的にはかまどをひとつにするという意味での扶養家族は存在しないわけだが、その時点で同居していなくとも、仕送りによって扶養義務を果たしているものがあり、前問の回答で1人世帯が74戸あったが、そのうち8戸が生活援助などによって誰かを扶養している数になる。

それでは扶養者を抱えている世帯主205戸（70.45%）についてその人数がどれくらいか調べてみた（Q10）。その結果、扶養者1人が58戸（19.93%）、扶養者2人が48戸（16.49%）、扶養者3人が34戸（11.68%）、扶養者4人が31戸（10.65%）、以下6人以上の扶養家族を抱えている世帯主が34戸（11.68%）もあり、その中には9人も扶養しているものが4戸（1.37%）ある。ただし、扶養者なし66名、無回答20名の86名を除く、扶養者あり205名を基数にすると丸括弧内の割合はそれぞれもっと高くなる。

ところで、一口に扶養といっても、単に食べさせている場合もあれば、着る物の面倒をみたり、教育費を出したり、あるいはお金を仕送りしている場合もある。こうした扶養内容のうち、「仕送り」について当たってみると（Q10-b）、31戸（10.65%）が村外にいる身内のものに仕送りをしているという回答をえた。この場合も「扶養責任がある」

と回答した127名を基数にとると、その内24.4パーセントの者、約4人に1人が「仕送り」をしていることになる。

2 家族構成

2.1 世帯主の性別と年齢

ガーナ北部の諸民族はほとんどが父系血縁社会であり、南部においてもアカン系諸民族とごく少数の海岸諸民族が母系制であるが、その他の民族は、父系制社会を形成する。すなわち、アニ・パウレ、ンゼニ、アシャンティ、アクアペンなどは母系制であるが、この村のマジョリティーであるガ・アダンベ系の諸民族シャイ、クロボ等は父系制である。

世帯主の性別は父系制をとる民族では当然男性であるが、すでに述べたように、寡婦、夫と離別した女性、あるいは女性のシングル生活者の場合は、女性が世帯主になっている。また、母系制の民族では女性が家政の責任を持ち、出自継承をおこなっているため、女性が世帯主である。もっとも、母系制であっても土地等の家産はクランに属し、その女性の息子たちによって管理されるのが普通で、かならずしも家産の管理者を意味するわけではない。この村では202戸（69.41%）の世帯主が男性であり、88戸（30.24%）が女性である（Q11a-3）。

これらの世帯主の年齢についてみると（Q11a-4）、20代（20～29歳）が53戸（18.21%）、30代（30～39歳）が77戸（26.46%）、40代（40～49歳）が63戸（21.64%）、50代（50～59歳）が49戸（16.83%）、60代以上（60～80歳）が46戸（15.80%）、不明が3戸（1.03%）であった。世帯主の年齢分布はもっとも若い世帯主は20歳で4戸、もっとも高齢の世帯主は80歳で1戸であり、この間20歳代から60歳代までかたよりなくほぼ同程度の割合で分布している。

2.2 人口の構成比

フェイス・シートをもとに男女の人口構成比を見ると、男560名（47.13%）、女628名（52.86%）で、女性が68人（5.72%）多い。なお、ちなみに、男女の構成比を考えず、単に1世帯の中に何名の男性が共住しているか、何名の女性が共住しているか、それぞれ統計をとってみた（Q11a-1, Q11a-2）。1世帯の中に「男性は1人」が114戸（45.78%）、「男性は2人」が54戸（21.68%）、「男性は3人」が37戸（14.85%）、「男性は4人」が18戸（7.22%）、等の順で、最高は「男性は14人」からなる世帯が1戸（0.41%）であった。

これに対して、1世帯の中に共住する女性の数に当たってみると、「女性は2人」がもっとも多く63戸（27.75%）、「女性は1人」が56戸（24.66%）、「女性は3人」が50戸（22.02%）、「女性は4人」が26戸（11.45%）、「女性は5人」が17戸（7.48%）の順で、もっとも多かったのが「女性は12人」からなる世帯が1戸（0.44%）であった。

2.3 家族構成

大きな世帯（21人）から小さな世帯（1人）までに数的に大きなバラエティがあることが明らかになったが、そうした世帯の共住者の家族関係はどのようになっているのだろうか（Q11a-5）。

もっとも多いのが「夫婦とその子供たち」のいわゆる「核家族」形態の世帯で86戸（29.55%）と全体の約3割を占めている。次が「男1人世帯」の54戸（18.55%）で、独身者や寡男（やもお）などがこれに入る。3位が「女親とその子供たち」で46戸（15.80%）である。この世帯の実態を検討してみると、1) 男親は通い夫である。2) 男親は出稼ぎに出たままである。3) 男親はいない。つまり未婚の母である。4) 寡婦である。などである。4位は「女性の1人暮らし」で18戸（6.18%）である。その実態をみると、子供のいない寡婦、まったく子供のいないシングル、子供がいても家出して現在共住者のいない世帯等である。5位が「男親と子供たち」からなる世帯で16戸（5.49%）で、女親がいないのは、彼女が子供を残して死亡したか、離婚して彼女が家を出た世帯である。女親が出稼ぎに行き帰ってこないという事例は把握していない。6位が「一夫多妻」の世帯で14戸（4.84%）で、当然妻たちの子供たちが共住している大世帯である。7位が「夫婦とその子供たち及び親類縁者」なる世帯で8戸（2.74%）で、親類縁者を具体的に見てみると、夫婦の兄弟姉妹及びその子供たち（夫婦から見れば甥姪）であった。同じ7位に「夫婦のみ」の世帯が8戸（2.74%）、これが「若夫婦」なのか「老夫婦」なのか、調査段階では不明であった。また、「祖母と孫たち」で暮らす世帯両親が事実上欠如している「欠損家族」が8戸（2.74%）があるが、これは平たくいえば祖母から見ると自分の子供（息子や娘）がいない世帯で、孫から見れば自分の両親がいない世帯である。どうしてそのような世帯になったのか実態は把握できなかった。ただ、推察するところ、両親ともに出稼ぎのため村を出たのかもしれないし、また両親が死亡あるいは行方不明で祖母が孫を引き取ったのかもしれない。7位は3位の「女親とその子供たち」に「孫たち」が加わった世帯7戸（2.40%）で、3世代家族と見ることができる。すなわち、こうした世帯は基本的には母系で祖母とその娘（母親）とその娘の子供たち（孫たち）で構成されている世帯である。

以下、戸数は3戸以下で、数はきわめて少ないが、「夫婦と孫」3戸（1.03%）はすでに述べた「女親と孫たち」と同様に、夫婦といっても老夫婦であり、子供たち（孫たち）を置いて、父母（両親あるいはどちらかが欠損している場合もある）が村外に出てしまい、「祖父母と孫たち」の世帯になったと推察される。「女親とその子供たちと親類」からなる世帯が2戸（0.68%）は3位の母子家庭に女親の兄弟姉妹などが加わった世帯である。「夫婦とその子供たちとその孫（娘の子）」2戸（0.68%）はすでに述べた「女親とその子供たちとその孫たち」と同じ類型だが、「祖父母とその娘とその娘の子供たち（孫たち）」の母系3世代家族である。「夫婦とその子供たちと夫の両親」1戸（0.34%）は逆に父系3世代家族である。言い換えれば、結婚後、父方居住により妻は嫁入りして、そこで出産し

家庭をつくったケースである。このほか、1人の男と血縁関係のない男が共住している世帯、逆に1人の女と血縁関係のない女性が共住している世帯がそれぞれ1戸ずつあった。これらの分類に入らない世帯が12戸（4.12%）不明が3戸（1.03%）であった。

3 教育

学校教育が植民地時代にミッション・スクールからはじまったことはすでに述べた。政府が公教育を開始したのは20世紀になってからで、初等教育の普及は漸進的であった。しかも、女子教育の普及は遅々として進まず、就学率は男子に比べ著しく低かった。しかし、1961年、ンクルマが初代大統領に就任後、初等教育を義務化し、教育の普及が進展し、女子の就学率も高まった。ガーナの初等教育は入学年齢を6歳からとしたが、修業年限は固定されなかった。小学校（primary school course）コースは6年間、その後、中学校（middle school）は4年間と設定された。

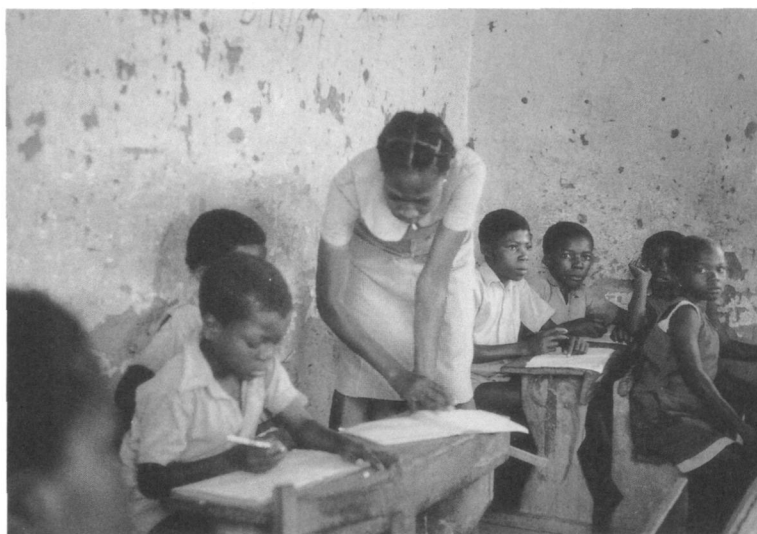


写真3 小学校の授業風景

さて、そこで、この村の教育の普及状況について調査をおこなった。まず、世帯主を対象に「学校に通ったことはあるかどうか」を質問したところ、「ある」と回答したものが190名（65.29%）、「ない」と回答したものは99名（34.02%）であり、学校教育を受けた経験者は6割以上になる。ただし、ここで注意しなければならないのは、男性でも高齢者はまだ教育が義務化されなかった時代に少年期を過ごしており、また女性は就学率の低かった時代で、そのことを計算に入れると、40歳未満の男性だけを調査対象にすると、就学率はかなり高くなることが推定できる（Q11b）。

つぎに、学校に通ったことがあるものに、それでは「何年間学校へ通ったか」と、そ

の年数を尋ねてみると、10年間で74名（25.42%）で中学校卒業者が2割5分を占めた。ついで、8年間ないし14年間学校に通ったと回答したものがそれぞれ19名（6.52%）ずつで、合わせて38名（13.04%）になり、その内容を検討してみると、中学で退学（8年就学したもの）したり、つぎに高校に進学後退学したもの（14年就学したもの）であろう。

以下、小学校卒（6年就学）が13名（4.46%）、小学校中途退学（3年就学、5年就学）が21名（7.21%）である。その他、7年通ったもの8名（2.74%）、9年通ったもの（2.40%）、2年通ったもの5名（1.71%）、4年通ったもの5名（1.71%）等々、就学年数はてんでばらばらである。

ただし、就学年数が16年と17年があり、年数から見ると、大学へ進学したものも5～6名いると推察される。質問12で「学校へ通ったことがない」と、回答したものが101名で、前問の未就学者99名と数が一致しないが、これはたぶん、最初は「通ったことがある」と、回答したが、この後で「何年間通ったか」と、尋ねられて、年数が回答できるほど学校へ行かなかったものと推定される（Q12）。

4 言語

質問13で「何語を使用しているか」の調査をおこなった（Q13）。アフリカは一般に多民族国家で多言語社会といわれている。普通の人々でもいくつかの言語を使って生活しているのが珍しくない。少なくとも自民族の言語と公用語（リンガ・フランカ）ができなければ日常生活に支障をきたすこととなる。そこで最もネイティブな言語を第1言語とし、以下、話せる度合いに応じて第2言語、第3言語という具合に調査をおこなった。

この村は民族としてはシャイが多数派なので、ネイティブな言語としてはシャイ語を話す人々が最も多いのは当然である。このように、第1言語は自分の出身民族の言語とほとんど一致する（Q13a）。ところが、「第2言語として何語を話しているか」になると、トップがガ語を話すものが81名（27.83%）、2位がアクアペン語50名（17.18%）、3位がエウェ語35名（12.02%）で、互いに近接している民族の言語をマスターしているわけだが、4位に英語21名（7.21%）があげられていることに注目したい。いうまでもなく、英語はガーナの公用語であり、官庁、大学、ホテル、その他の公共施設などでは日常的に使用されており、この村でも第2言語として英語を話せるものが21名で7パーセント以上いることが確認できた（Q13b）。それが、第3言語となると、英語が1位で49名（16.83%）となり、あまり得意ではないが、ある程度なら話せるというものが16パーセント以上いることになる（Q13c）。つまり、英語を第2言語としたもの、英語を第3言語としたもの、両者を合わせるとこの村で英語が通ずるものが70名（24.05%）になる。また、第3言語としてフランス語をあげたものが2名（0.68%）でてきたが、これはたぶん隣国（コートジボアールとトーゴ）が仏語圏なので、そこに滞在したときに身につけたものと考えられる。

第4言語として、片言なら話せる言語として英語をあげたものは49名（16.83%）あり、

ここまで英語会話能力のレベルを下げると、英語で意思の疎通をできるものは合わせて119名(40.89%)もあり、ガーナの海岸部では村であってもかなり英語が普及しているのがわかる(Q13d)。第5言語として、英語をあげたものの英語力は測りようがないが、やはり英語がトップで37名(12.71%)となる。以上、多言語状況を調査したわけだが、この村(291名)の世帯主で2つの言語を話せるもの278名、3つの言語を話せるもの198名、4つの言語を話せるもの96名、5つの言語を話せるもの35名、6つの言語を話せるもの9名、7つの言語を話せるもの3名となる。

5 職業構成

5.1 主たる職業

アコラボ村は村といっても純然たる農村ではない。幹線道路沿いに市街地があり、日常的には村だけでも生活できる完結したコミュニティーを形成している。そこで、この村の住民(世帯主)の主たる職業について調査をおこなった。

まず、この村の職業のトップはいうまでもなく「自営農夫」である。約4割すなわち118戸(40.54%)は農業で生計をたてている。2位が「農業労働者」で36戸(12.37%)、これは自分の生産手段(農地)を持たない賃金労働者で、その時々契約で農業労働に従事するものである。3位が「先生」で30戸(10.30%)、4位が「商人」で29戸(9.96%)となり、村では「先生」と「商人」がそれぞれ1割を占める職業になっている。村の公立の小中学校やミッション・スクールを合わせると、先生を職業とするものの割合が意外に高いのが見てとれる。つぎに注目されるのが「土器製作者」である。11戸(3.78%)もの職人(陶工)がいて、乾期は土器製作がさかんにおこなわれ、地方市場を通して取引されている。調査中に女性の土器製作の状況が観察された。6位が「洋裁屋」で10戸(3.43%)、ミシン1台を資本にして様々な注文に応じて衣服を縫い上げる職業である。7位が「役人」で7戸(2.40%)、8位が「運転手」で6戸(2.06%)、9位が「ココア農場労働者」で5戸(1.71%)、これはすでに述べた「農業労働者」と職種は基本的に同じだが、「ココア農場」の経営者のもとで雇用される「賃金労働者」であり、かつてこの職種は大勢のものが従事し、生計をたてていたもので、この村の歴史的特殊性を現すものとして一応区別することにした。その「ココア農場労働者」が5戸(1.71%)しか残っていないということはこの村のココア生産の凋落振りを示すものを考えられる。

以下、主たる職業を「事務員」、「牧師」、「守衛」、とするものがそれぞれ4名(1.37%)であった。また、「食器製造販売者」が3名(1.03%)あるが、これはすでにあげた「土器製作者」ではなく、木、竹、ひょうたん、金属などを材料につかい、様々な食食用具(ひしゃく、スプーン、へらなど)を製作している職人である。村に2軒ある職業としては「鍛冶屋」、「魚屋」、「治療師」、「労働者(便利屋)」、「煉瓦職人」、「パン屋」、「写真屋」で、その

ほか村の商店に雇われている「店員」も2名いる。そして村に1軒しかない職業は「大工」, 「酒造業者」, 「機械工」, また村に1人しかない専門職としては「タイピスト」, 公的な専門職としては「森林管理者」, 公的に雇用されている職業としては「道路掃除人」がある。酒造り（アパティシユ）は通常女性がやれない職業となっている。

以上, この村で主たる職業として自ら認めている職種は28種であり, 「無職」と回答したものは2名であった (Q14 a)。

5.2 副業

農村地域では, 「主たる職業」のほかに「副業」を持っているものが多い。そこで「副業」としてどんな職業に携わっているのか尋ねてみた。もっとも多いのが「農業」の103戸 (34.91%) で, その副業の意味は, 賃金労働者であっても家の周囲に畑を持っている人が多く, たとえば先生や牧師の仕事のかたわら畑を耕したり, また, 庭先で家庭菜園をおこない, トマト, バナナ, 果物などを自家栽培して地方市場へ持って行き, 収入を得ていることを指している場合が多く, 自給自足的な農業や小遣い稼ぎの農業のことである。2番目に多い副業は「商業」であるが, 副業としての割合は低く13戸 (4.40%) にすぎない。むしろ, きわめてアフリカ的な副業として注目されるのが「酒造り」である。この村では12戸 (4.04%) の家が副業として「やし酒」をつくり売っていた。村には主たる職業として「酒造業者」があり, 大量の「やし酒」を醸造し, それをさらに蒸留しアルコール度の高い「焼酎」をつくって販売している酒造家が1軒あるが, それとは別に零細な農家が片手間に「やし酒」をつくり, 収入を得ている家がけっこうあるわけである。

その他, 副業を持っているものとして「洋裁屋」7戸 (2.37%), 「農場労働者」4戸 (1.35%), 「治療師」4戸 (1.35%) がある。すでに前問で「治療師」を本業とするものが2名あったが, 副業として「治療」をおこなうものが4名あり, 副業としての治療師が多いのはアフリカ的な職業の特徴といえるかもしれない。このほか本業にはなかったが, 副業に顔を出した職種としては「看板屋」, 「靴屋 (靴直し屋)」, 「狩猟」などがある。ただし「副業はない」あるいは, あっても「回答しないもの」が33戸 (11.18%) あった (Q14b)。

6 農業経営の規模

6.1 経営面積

さて, 本業を「自営農業」と回答した118戸 (40.54%) の中には (Q14a), 経営規模に様々な格差がある。すなわち, 一口に「ファーマー」といっても, 広い農地を持ち, 企業的に農業経営をするものから, せいぜい宅地の周囲に付随した自給用の農地を持つものまで, その規模は実に多様である。そこでそれらの農業経営の規模を調査してみた (Q14c)。ただし, 農地の規模は自己申告によっただけで, 実際に測定したわけではない。

まず、100エーカー以上の農地を持ち、農業経営をおこなっているものが4戸（1.37%）あった。彼らがアコロボ村にそれだけの広い農地を囲い込んで個人で経営しているかどうかは不明である。と同時にその全てが農地として耕作されているかどうか不明である。ついで、51～100エーカー未満の農地を経営しているものが2戸（0.68%）、41～50エーカーの農地を経営しているものと同じく2戸（0.68%）あった。そのほか、これに順ずる31～40エーカーの広い土地を経営している農家が1戸（0.34%）で、大規模な農業経営者は合計9戸（3.07%）になる。つぎに21～30エーカー未満の農場を経営する、いわば中堅的な農業経営者が12戸（4.12%）ある。また、11～20エーカーの農地を経営するものは45戸（15.46%）である。そして、4～10エーカー経営規模の農家が82戸（28.18%）1～3エーカーの農地を経営する零細な農家が58戸（19.93%）ある。農地のないものが13戸（4.47%）で、まったく農業をおこなっていない家はきわめて少数である。なお、農地面積について回答を拒否したものの50戸（17.18%）あり、土地をめぐる調査はかなり難しいことがわかった。

6.2 栽培作物

つぎに、農場では「どのような農作物が作られているのか」、調査をおこなった（Q15）。この質問は複数回答を可としたので、度数は1314になった。

さて、「もっとも多く栽培されている作物は何か」。それは、「キャッサバ（マニオック）」で291戸中226戸（77.66%）のいえて栽培されていた。2位が「プランティン・バナナ（料理用バナナ）」195戸（67.01%）、3位が「トウモロコシ」で189戸（64.94%）、4位が「カカオ（ココア）」で148戸（50.85%）、5位が「ココヤム」で136戸（46.73%）、6位が「ヤム」で102戸（35.05%）、7位が「バナナ」で83戸（28.52%）、8位が「油やし」で70戸（24.05%）、9位が「コントムレ」で18戸（6.18%）、10位は「トウガラシ」で15戸（5.15%）である。11位以下で注目されるのは砂糖キビ13戸（4.47%）、オレンジ11戸（3.78%）、玉ネギ7戸（2.41%）等でオクロ（Okro）とあるのはオクラのことで、ガーナの呼名である。

主食として栽培されている作物はキャッサバ、プランティン・バナナ、トウモロコシ、ヤムイモであることがわかる。アンケート調査（Q16）では自家栽培以外で食用としている植物いわゆる野性植物で食用にしているものとしてあげられたOcimum virideとはシソ科メボウキ属のバジリコの一ことで、英名ではfever plant, fever leaf, teabush等と呼ばれているものである。またEntandrophragma angolenseはセンダン科の植物で、英名はGedunohor。E. cylindricumは英名ではWest African cedarのことである。

7 食用動物

7.1 家畜の種類

この村で家畜を飼育しているいえは189戸（64.94%）で、飼育していないいえは94戸

(32.30%)、この質問に無回答が5戸 (1.71%)、不明が3戸 (1.03%) であった。家畜を飼育しているいえのうち (複数回答)、もっとも多く飼育されているのは「鶏」で138戸 (73.01%)、ついで「ヤギ」102戸 (53.96%)、「ヒツジ」64戸 (33.86%)、「アヒル」27戸 (14.28%)、「七面鳥」8戸 (4.23%) である。そのほか、猫が5戸 (2.64%)、犬が5戸 (2.64%) の家で飼われているが、食用とされているのかどうかは不明である。このほか「ウサギ」5戸 (2.64%)、「ウシ」3戸 (1.58%) を飼育している家があるが、頭数は不明である。以上、この村で飼育されている動物はほとんどが小家畜である。

7.2 食用にしている野生動物

食生活の中で野生動物はどの程度利用されているのだろうか。質問18 (Q19) の回答に示されているように「野生動物を食べているもの」が287戸 (98.67%) で、ほとんどすべてのものが野生動物を食べている。それでは「どのような野生動物を食べているのだろうか」(複数回答)。

もっとも多く食べられている野生動物は、「羚羊 (Royal antelope)」で262戸 (91.29%)、以下、「グラス・カッター (Grasscutter)」が236戸 (82.22%)、「黒腹せんざんこう (Black-bellied pangolin)」が74戸 (25.78%)、「かたつむり (Snail)」が59戸 (20.55%)、「虫類、方名で同定できなかったもの」49戸 (17.07%)、「カモシカの一種 (Ewio)」が36戸 (12.54%)、「ネズミ (Rat)」が27戸 (9.40%)、「やまあらし (Brush-tailed porcupineとCrested porcupine)」が27戸 (9.40%)、「ジャコウねこ (Two spotted palm civetとCivet cat)」が26戸 (9.05%)、「カメの一種 (Akokoherwe)」が23戸 (8.01%)、「おおとかげ (Land monitor)」が15戸 (5.22%)、「リス (Squirrel)」が15戸 (5.22%)、「ネズミの一種 (Kusi)」が11戸 (3.83%)、「ブッシュバック (Bushback)」が5戸 (1.74%)、「野ウサギ (Rabbit)」が4戸 (1.39%) であった。

8 家計

8.1 年収

質問20 (Q20) では「年間、どれくらいの現金収入を得ているのか」尋ねてみた。これは、正確な回答をうるのは難しく、回答にも疑いがあるが、一応各世帯の年収を把握するために統計をとってみた。

年間3,001～6,000セディの間の収入を得ているものがもっとも多く、101戸 (34.70%) であった。現金収入が0～2,000セディまでのものが34戸 (11.68%) で、この村で最下層に属する世帯と考えられる。高収入をあげている富裕層はどれくらいの現金収入をあげているか調査してみると10,000～15,000セディが18戸 (6.18%)、15,000～20,000セディが12戸 (4.12%)、そして、20,000セディ以上が14戸 (4.81%) ある。このように村内には収入に

よる貧富の格差がはなはだしいのがわかる。当時公務員の給料が月1,000~1,300セディほどであったが、食費をまかなうこともできなかった。食費だけでも1か月5,000~6,000セディはかかっていたであろう。しかし、人びとは副業をもっていて、食べるのにそれほど苦労している家は見あたらなかった。

8.2 現金収入の職種

それでは、「どのような職業で現金収入を手に行しているのだろうか」(Q21, 複数回答)。質問21の回答結果を見ると、やはり農業収入によって現金を手に行している人が圧倒的に多く168戸(57.73%)で、農業を経済的基盤とする人びとの村であることがわかる。ただし、人びとはまた農業の他に様々な副業から収入をえており、いわゆる「兼業」農家に分類されるいえも含まれている。その兼業の割合は把握できないが兼業内容としては「賃労働兼業農家」、「菜園を持つ労働者」、「菜園を持つ先生、役人、牧師」、「菜園を持つ手工業者(職人)」等である。その他現金収入を得ている職種としては「鍛冶屋」、「酒造業」、「製粉業」、「パン屋」、「写真屋」等々多種にわたっている。農業以外の現金収入としては「日雇い労働」が68戸(23.37%)、「商業」が35戸(12.03%)、「常雇い労働」が22戸(7.56%)、「教師」が18戸(6.19%)、「洋裁」が11戸(3.78%)となり、専門職で資格や技術のあるものは安定的な現金収入を得ているが、それ以外で現金収入を得る手段は肉体労働となる。

8.3 借金

質問22において「お金がないとき誰に頼りますか」(Q22, 複数回答)という借金のあてを尋ねると、「頼る人なし」と回答したものが109戸(37.46%)と、意外な結果が得られた。すなわち、アフリカ、とりわけ農村部では「共食」が一般的で、クランの助け合いの絆が強く、物の貸借も一般におこなわれているので、「頼る人」がいると考えていたが、金銭の貸借には意外に厳しいことがわかった。しかし、「頼る人がある」ものの内わけをみると、「友人」が36名(12.37%)である。ただし、この「友人」関係の中には「教会関係者」も入っている。ついで、お金を借りる相手として「夫」ないし「妻」と回答したものが32名(11.00%)、「金貸し」が23名(7.90%)、「銀行」と回答したものが22名(7.35%)であった。「金貸し」が金融業として村に存在するのかどうか確認はしていないが、インフォーマルに金を貸す筋があるようだ。つぎに、「両親」が19名(6.53%)、「兄弟姉妹」が18名(6.19%)、「雇用主」が14名(4.81%)、「子供(息子や娘)」が11名(3.78%)、「親類」が9名(3.09%)であった。ところで、「銀行」と回答したものが22名あったが、それらは、たぶん「農場経営者」か「商店主」などで、大きな経営資金を動かしているものと思われる。もちろん、この村には銀行はないので、首都アクラや州都コホリドアにある銀行に借りに行くものと思われる。

9 医療と飲食

9.1 近代医療と民間医療

家族に病人がでたとき、まず最初にどういった行動をとるのだろうか。この質問 (Q23, 複数回答) に対して病院に行くなどの「近代医療に頼るもの」が267戸 (91.75%) を占める。これは、この村から比較的近距离にあるスフム市や、州都コホリドアに近代的な病院があり、容易に病人を病院に運ぶことができるからで、9割以上のものが近代医学に頼ると推察される。にもかかわらず「独力で薬草などをつかって治療する」と回答したものが83戸 (28.52%) で3割弱ある。これらの回答を検討すると、かかった病気の種類によって対応の仕方も異なるわけで、それがこの回答にも影響を与えたように推察される。病人がでたとき「薬を買いに行く」と回答したものが16戸 (5.50%) あるが、これは、マラリアなどは病院に行く前に市販の薬で治療を試みるものも多く、こうした回答がでたものと推察される。また、「伝統的な民間医療をやってみる」と回答したのも15戸 (5.15%) あり、これらの治療法については後で詳しく検討する。

ガーナでは国立病院も州の病院もミッションの病院もプライベートな病院も全て厚生省 (the Ministry of Health) の管轄権の下にある。医療費は厚生省の基準で金額が決められている。きわめて貧しい者、軍人年金受給者、公務員及びその家族、公立学校の生徒などは基本的に治療費が無料である。また、結核、いちご腫 (frambesia)、ハンセン病は治療費が無料である。ただ一般的に言って、ミッション系の病院は政府系よりも医療費が高いといわれている。「近代医療に頼る」と回答したものが多いが、調査によると、貧しい者は治療費が安い「伝統医 (herbalists, native doctors)」に頼る傾向が高いといわれている。また、これまでの人類学調査によると、アフリカの人々は「近代医療」にかかりながら「伝統医療」もおこなっていると報告されている。

そこで、質問24 (Q24) では「伝統医がつくる薬草を使っているかどうか」尋ねてみた。「使う」が210戸 (72.16%)、「使わない」が78戸 (26.80%) であった。つまり、この村の7割強の者が「民間医療」に頼っていることがわかった。ということは、前問 (Q23) で「伝統的、因襲的治療に頼る」が15名であったという回答に比例しない。その理由は「病人がでたときに《最初に》にとる行動」の最初にという問い方にポイントがあったと考えられる。すなわち、まずは病人を病院に運びこみ、その後様々な治療行為をおこなうのであろう。それでは、「民間医療 (薬草など) としてどのようなものが使われているのか」あげてもらった (Q25, 複数回答)。回答としてあげられた薬草の種類は全部で34種類あった。最も多く利用されている薬草はQ16でもあげられていた *Ocimum viride* 98戸 (33.67%) である。ついで *Justicia flava* といい、キツネノマゴ科の植物で37戸 (12.7%)、子どもの熱さまし、下痢などに使われている。*Alstonia boonei* はキョウチクトウ科の植物。葉、根、樹皮はリュウマチ痛の治療に用いられる36戸 (12.37%)。 *Trichilia Heudelotii* は

センダン科の植物で樹皮を煮つめて、炎症のある箇所につける27戸 (9.27%)。以下薬効の判明したものだけをあげると、*Rauwolfia vomitoria*はキョウチクトウ科の植物で、葉のみこむと、嘔吐をおこす20戸 (6.87%)。 *Paullinia pinnata* はムクロジ科の塗薬で、根と種を毒として使用、止血にもつかう20戸 (6.87%)。 *Hyptis pectinata*はシンケイ科の植物で、子ども用の薬である10戸 (3.43%)。 *Thevetia nerifolia*はキョウチクトウ科の植物で、解熱に使用されている3戸 (1.03%)。しかし、残念ながらその民間医薬がなんであるのか、調査者の方で同定できないものが114種類もあった。いかに多くの民間医薬が使われているのか、驚くと同時に、それらが薬効があるのかどうか、将来検討すべき問題である。その他、使用者自身がそれがなんであるのかわからずに使用しているものが74種類あった。

9.2 医療費

近代医療にせよ民間医療にせよ、家族の中から病人が出て治療を受けさせるとなると、世帯主は相当な医療費を負担しなくてはならない。いったい世帯主は年間どれくらいの医療費を支払っているのだろうか。①1,000~2,000未満セディが38戸 (13.05%)、②200~300未満セディが35戸 (12.02%)、③300~400未満セディが30戸 (10.30%)、④400~500未満セディが30戸 (10.30%)、⑤600~700未満セディが27戸 (9.27%)、⑥500~600未満セディが23戸 (7.90%) の順で、6割以上の世帯主が200~2,000未満セディまでの間の医療費を支出している。3,000セディ以上の医療費がかかった世帯主は9戸 (3.09%) あり、逆に200セディ以下の世帯主が36戸 (12.36%) ある。

こうした家族の病気に関わる世帯主の負担は扶養している家族数に関係しており、一般に家族数が多いほど医療費はかかるわけで、また子供や老人の数によっても医療費の負担は異なるわけで、医療費は家族構成との相関関係を見る必要があるが、今回はそこまで分析はできなかった。

9.3 医療機関

つぎに、家族に病人が発生したとき、どの病院に運んだか質問した (Q27, 複数回答)。この村の人々が「近代医療」を受けるために家族を運ぶ都市でもっとも近くに位置しているのがスフム市である。スフム市には4つの病院がある。1) 国立スフム病院 (Suhum Government Hospital), 2) スフム中央病院 (Suhum Central Hospital), 3) スフム病院 (Suhum Hospital), 4) スフム診療所 (Suhum Clinic) である。病人が発生したとき、「スフムの病院に運ぶ」と回答したものがもっとも多く226戸 (77.67%) である。アコラボ村にも保健所 (Akorabo Hospital) があるが、病人を運んだ人は5戸 (1.72%) にすぎなかった。

病人を州都コホリドゥアに運んだものもある。この都市には1) 国立コホリドゥア病院 (Koforidua Government Hospital), 2) コホリドゥア中央病院 (Koforidua Central Hospital),

3) コホリドゥア病院 (Koforidua Hospital), 4) コホリドゥア・エフチアセ病院 (Koforidua Eftiase Hospital), これら4つの病院に家族を運び込んだ家は31戸 (10.65%)であった。

また、コホリドゥア市にはミッシヨンの医療機関が2つある。1) コホリドゥア・ローマン・カソリック病院 (Koforidua Roman Catholic Hospital), 2) コホリドゥア・聖ヨセフ病院 (Koforidua Saint Joseph Hospital) である。これらのミッシヨンの医療機関に家族を運び込んだ家が22戸 (7.56%)であった。

このように、家族に病人が発生した場合、もっとも近くの都市スフム市の病院に家族を運ぶか、それよりは遠いが州都コホリドゥア市の病院に家族を運び込む場合もあり、それらを合わせると、これらの都市の病院で近代医療を受ける人が9割をこえ、この村は地方とはいえ距離的に都市の近くにあり、近代医療に恵まれているといえる。

9.4 飲料水

本プロジェクトは「なぜ下痢症が多発するのか」という問題を究明するのが目的であり、この問題に接近するため「飲料水」の調査をおこなった (Q28, 複数回答)。アフリカでは不衛生な水を飲用し、「下痢」を引き起こすことが多いからである。この村で利用されている「飲料水」は、1) 井戸水224戸 (76.98%), 2) 雨水141戸 (48.45%), 3) 流れ (小川) の水97戸 (33.33%), 4) 川の水48戸 (16.49%), 5) 池の水3戸 (1.03%)となる。

このように村内の主要な場所に井戸が設置されており、井戸水を利用している割合が高く、同時に相変わらず村内を流れる川や流れ (小川) あるいは池の水を飲み水に利用している家が5割を占め、必ずしも安全な水だけが利用されているわけではないことがわかる。なぜ「川や池」の水の利用がやめられないのか。理由は井戸までの距離が遠く、川が家の近くにあるからである。衛生的な水とされる「雨水」も利用できるのは貯水設備 (Cistern) 作れる富裕な家だけで、村全体としてはまだ安全な水が十分確保されているとはいえない。しかも、「井戸水」も「雨水」貯め置きしたままで覆いをつけなければ安全度は低くなる。もし、もっとも安全な水を飲もうとするなら煮沸するのが一番である。

つぎに「飲み水を煮沸するかどうか」尋ねてみた



写真4 村の共同利用の井戸、飲用水として最も多くの人々が利用している

(Q29)。飲む前に「煮沸する」と回答したものは13戸(4.46%)にすぎない。残り278戸(95.53%)は「煮沸しない」で生水のまま飲んでいる。その中には、「川や池の水」をそのまま飲んでいるものがあり、「下痢や寄生虫による病気」の危険性が高いことはいまでもない。



写真5 富裕な家は雨水を確保する貯水設備(cistern)をもっている。

9.5 食事

下痢の原因究明には食べ物も調査する必要がある。調査法としては、調査の前日の「昼食」と「夕食」、そして調査当日の「朝食」について実際に「何を食べたか」を調査した(Q30)。

この調査はアコロボ村の住民が「食事を3食とっている」ことを前提としておこなわれたものではない。が、しかし、それでは「1日2食が普通」といわれるアフリカ社会で、実際に、この村(郊外タウン型農村)では、どのような食事が一般的なのか、その実態を明らかにし、ついで、朝、昼、夕の主食と副食の材料と調理法に何か特徴があるのか。その基本的なパターンと変異状況を探ってみることにしたのである。

まず、食事の摂取状況についてみると、「昼食を食べなかった者」は38人(世帯主)で13.05%、「夕食を食べなかった者」は15人(世帯主)で5.15%、「朝食を食べなかった者」は36人(世帯主)で、12.37%であった。この結果を見ると、朝食や昼食を抜いている者が1割強あるということになる。「1日2食」の者は朝食や昼食を抜いている場合が多いと推定されるが、しかし、この村は2食主義ではなく、基本的には「1日3食」がパターンになっているといえる。それでは、昼食、夕食、朝食別に食事内容を検討してみたい。

9.5.1 昼食(Q30)

昼の主食としては1位が「プランティン」で76戸(26.11%)、2位が「トウモロコシ」で55戸(18.90%)あり、この2つが主食の材料(合わせて45.01%)になっている。3位はすでに述べたように「昼食は食べなかった」と回答したもので38戸(13.05%)ある。昼食抜き理由がわからないが、1日2食の食伝統の影響かもしれない。4位が「パン等何かを口にしたもの」が33戸(11.34%)、ただし、パンは贅沢な食物とみなされている。5位が「キャッサバ」で25戸(8.59%)、以下「ココヤム」15戸(5.15%)、「米」5戸(1.71%)、「ヤムイ

モ」3戸 (1.03%), 「ココ」1戸 (0.34%) であった。回答者の中には主食を2種類とったものがあり、たとえば「プランティン」と「パン」あるいは「ココ」を食べたものがいたわけで、それを主食Ⅱとして統計にとった。その結果「パン類」, 「ココ」, 「ココヤム」, 「キャッサバ」, 「トウモロコシ」, 「ヤムイモ」が主食Ⅰとあわせて食



写真6 村のパン焼釜

べられたことになる。ただし、2種の主食を取った者は213人中22人で10.33%であった。

さて、これらの昼食の材料は「主食としてどのように料理されたのであろうか」。料理法は根菜類と雑穀類で以下のように異なっている。まず、根菜類で「プランティン」の場合、皮をむき茹でて木臼でつき、餅状にする。この料理のことを「フーフー」といい、「キャッサバ」や「ヤムイモ」も同じやり方で「フーフー」に料理される。

「キャッサバ」の場合は、皮をむいた生のキャッサバを粗くすりおろした後、液体を取り除き、素焼きの土なべで炒るか、天日で乾燥させてキャッサバ粉を作り、それが「フーフー」の材料になる。「ヤムイモ」の場合は、皮を剥き茹でて、木臼でついて餅状にして食べる。また、茹でたヤムイモを潰してそのまま食べることもある。なお、「キャッサバ」に「プランティン」や「ヤムイモ」を一緒について「フーフー」を作ることもある。

つぎに、雑穀類もこの村の重要な主食となっている。すなわち、「プランティン」, 「ヤム」, 「キャッサバ」, 等の根菜類のほかに、「トウモロコシ」と「米」も主食に採り入れられている。ただし、ガーナ北部が主産地である「ソルガム」^(註3)と「ミレット」はほとんど主食には登場しない。

ところで「トウモロコシ」の料理法だが、乾燥したトウモロコシの粗挽き粉をソフトボールくらいの大きさに丸めて団子にし、バナナの葉で包んで蒸す。火を通す前に醗酵させるので、少しすっぱい味がする。これが「ケンケイ (kenkey)」といい、ガーナの代表的な主食のひとつである。

さて、「フーフー」はすでに述べたように、副食として「スープ」がつく。副食の材料としては「コントムレ (kontomre)」87戸 (29.89%), 「パーム (palm)」53戸 (18.21%), 「魚」37戸 (12.71%), 「オクラ」8戸 (2.74%), 「アフリカ・ナス」2戸 (0.68%), 「トマト」2戸 (0.68%) である。「コントムレ」とは、サトイモの葉を副食として料理したものである。また、「魚」は活魚より油で揚げた魚を使うのが定番で、野菜ソースの場合は香料を

入れて味に変化をつけることもある。また、時には「ナス」や「オクラ」がソースに使われることもある。

9.5.2 夕食 (Q31)

夕食も調べてみたが、「プランティン」が主食の中心であることは昼食と同じである。傾向としては「ケンケイ」が減って、「パン類」と「米飯」、「キャッサバ」の料理が多くなっていく。問題は、夕食に関しては不明（無回答）が171名（58.76%）もあったことで、「食べたことは食べたが（食べなかったという回答は5.15%しかない）、主食として何を食べたか（アルコール類と何かをつまんで食べたことは食べたが）思い出せない」といった人（世帯主）が多かったのではないかと推定される。そのことを裏付けるように、主食を「食べた」といって材料をあげた者は291名中120名（41.24%）であったが、副食を食べたといっ、その材料をあげた者は291名中186名（63.92%）もあった。つまり、主食の材料をあげた者に比べ、副食の材料をあげた者のほうが66名多かったのである。

そこで、副食を食べた186人の食材の内訳をみると「パーム」127名（105.83%）、「コントムレ」33名（27.50%）、「魚」9名（7.50%）、「トマト等」9名（7.50%）、「オクラ」7名（5.83%）、「アフリカ・ナス」1名（0.83%）であった。その料理法を見ると、「スープ」が断然多く188名で156.67パーセントである。ついで、「シチュー」が44名で36.67パーセント、「揚げ物」がわずか1名で0.83パーセントであった。なお、「スープ」が100パーセントを超えるのは、料理法に複数回答を認めたからである。副食は「ヤシ油」、「コントムレ」、「魚」と、これらが3大食材であることは基本的に昼食と同じである。

9.5.3 朝食

それでは朝食の場合はどうか。一般に、アフリカでは朝に飲み物をとることはあるが、「朝食」として様式化した食事は無いのが普通で、簡単に夕食の残り物ですますことが多く、食べ物としては「ケンケイ」が多く88戸（30.24%）、ついで「プランティン」が56戸（19.24%）であった。これらの朝食が朝、料理として作られたかどうかは不明である。料理法にしても「プランティン」の「フーフー」なのか、たんに「蒸したプランティン」なのか、追跡調査はできなかった。だが、おそらく前日の作りおきで「冷たい食事」でなかったかと推定される。朝食は「食べなかった」と回答した家が36戸（12.37%）もあり、昼食、夕食と比較しても朝食をぬく家が多いことがわかる。ここで、朝食として注目されることは、昼食、夕食のメニューにのらなかった「煮豆」が31戸（10.65%）でメニューの4番目にあがってきたことである。「煮豆」は朝食に位置づけられている食べ物であるといえるかもしれない。

注3 ソルガムはガーナではギニア・コーン（guinea corn）として知られる。

9.6 飲み物

ガーナはココア生産地であるが、ココア豆は輸出産物であり、自国ではあまり消費されていない。しかし、飲み物としての「ココア」は「ミロ (milo)」という商品名で売られており、小中学生に人気のある飲み物である。この村でも「ミロ」はたいていの食料品店で売られており、日常的に飲まれている。ついで「紅茶」、「ココナッツのジュース」、「コーヒー」の順である。この質問 (Q33) に対し、「不明」が188戸 (63.72%) もでた。そこで、調査後、調査員とこの件について検討した結果、質問が、「飲み物 (ビバレッジ beverage) として何を飲むか」尋ねたため、「やし酒」や「水」などを飲んだものが回答を躊躇してしまい、このような回答数になったと考えられる。すなわち、この村でもっとも飲まれているのは「やし酒 (palm wine)」である。好きな人は朝から「やし酒」を飲んでいるが、「やし酒」はアルコール度数が低いとはいえ単なる「飲み物」とはいえず、これを「飲み物」と回答しなかったと推定される。この問い (Q33) では「やし酒を飲んだ」と回答したものは2戸にすぎなかった。ちなみに「やし酒」の作り方についてここで簡単に触れておくと、アブラヤシの樹液を採取し器に貯める。とりたての樹液は甘いですが、しばらく放置してくると酸味を増し、やがてアルコール化し、「やし酒」になる。

9.7 酒類の飲用度

アルコール分を含む飲み物はどの程度の頻度で飲まれているのだろうか (Q34)。まず、「飲まない」と回答したもの (世帯主) が94名 (32.30%) で、この村の3割強の世帯主は「酒類を飲むようなお付き合いはしていない」ことがわかった。一般にアフリカの村では「ひとり酒」という飲酒様式はほとんどないといってよい。たいがい集まって何人かで飲むのが普通で、何かの行事には酒がつきものである。したがって「飲まない」と回答したものは酒席の集まりには行かないことを意味している。

それでは「飲む」と回答した人の場合どのような頻度で飲まれているのだろうか。「毎日飲む」が80名 (27.49%)、「ときどき飲む」が49名 (16.84%)、「週に一回程度」が30名 (10.30%)、「月に1~2回」が22名 (7.56%)、「めったに飲まない、あるいは儀礼のときだけ飲む」が10名 (3.44%) で、無回答者が6名 (2.06%) であった。



写真7 ヤシ酒を蒸留してアパティシュ (焼酎) をつくる装置

9.8 飲用の酒類

さて、「飲む」と回答した191名について「どのような種類の酒を飲んでいるのか」を回答してもらった（Q35、複数回答）。もっとも多く飲まれている酒は「アパティッシュ」で165名（86.39%）である。「アパティッシュ」は、やし酒を蒸留したアルコール度数の高い焼酎である。その製法については後に詳述する。ついで「やし酒（palm wine）」で96名（50.26%）、「ビール」が33名（17.28%）、「ワイン」が4名（2.10%）、「シュナップス」が3名（1.57%）の順であった。「シュナップス」とは「オランダ・ジン」の商品名で、ガーナでは珍重されている輸入酒である。酒の種類を特定できなかったものが88名（46.07%）あり、「リキュール類」や「ソルガム酒」等がこの中に入っていると推定できる。

9.9 特別料理

質問36（Q36）では、祭りや祝い事などに特別料理を作ると回答した166戸（57.04%）について調査をおこなった。特別料理の主食としてあげられたのは「米」で、だんぜんトップの128戸（43.99%）で、「米飯」が特別な日の主食になっていることが明らかになった。「米」はガーナではサバンナ地帯南部で栽培されているといわれているが、おそらくガーナ米を市場で購入して料理しているものと推定できる。ついで、「ヤム」も特別料理の主食としてあげられているが、「米」よりはずっと少なく18戸（6.19%）、その他「ミレット、ココヤム」9戸（3.09%）、「トウモロコシ」8戸（2.74%）、「キャッサバ」2戸（0.69%）、「プランティン」1戸（0.34%）である。無回答（不明）が125戸（42.96%）であった。これは「米飯」をつくる余裕がないことが回答にあらわれたのではないかと解釈できるが、確認されていない。

表にある主食Ⅱは主食Ⅰのほかに作られた主食で、例えば、「米飯」+ α にあたる主食である。つまり、主食Ⅰを補う主食である。291戸の内、主食を2種類つくったいえは67戸（23.02%）であった。その主食Ⅱでは、「ヤム」が46戸（15.80%）でもっとも多い。推定するところ、祭りの日などに「米」料理を作るが、十分な「米」が用意できない場合、「米」料理を補充する意味で「ヤム」料理を作るようである。つまり、この村の特別料理（主食）は「米飯」か「米飯+ヤム」が一般的で、米飯とヤムの2種類の主食が用意されている時は、両者の比重がいえによって異なるということになる。「米飯」の料理法は日本式のお釜で炊くのではなく、お粥のようにして炊き上げている。

副食Ⅰとしての食材は「鶏肉」がもっとも多く94戸（32.30%）、以下「ヤギ肉」61戸（20.96%）、「羊肉」19戸（6.52%）、「その他、グラスカッターなどの野獣の肉」14戸（4.81%）、「油ヤシのスープ」12戸（4.12%）、「ピーナツ油」6戸（2.06%）、「コントミレ」4戸（1.37%）、「牛肉」3戸（1.03%）、「魚肉」3戸（1.03%）である。なお、「無回答（不明）」が75戸（34.25%）あった。

副食Ⅱ、すなわち副食Ⅰに加えて、もう1品、副食をつくったいえは34戸（11.68%）あ

った。副食Ⅱとして料理された食材は「ヤギ肉」12戸（4.12%）、「鶏肉」6戸（2.06%）、「羊肉」6戸（2.06%）など（以下略）があげられる。つまり、裕福な家では特別な料理になると、「鶏肉」だけでなく「ヤギ肉」や「羊肉」などが付加されるようである。これらの肉類の料理法は「スープ」83戸（28.52%）か、「シチュー」29戸（9.96%）であり、「ロースト」は1戸にすぎなかった。

「スープ」の料理法は、これらの肉を材料に唐辛子と塩を調味料として味付けし、野菜を入れてコトコトと煮る。豪華な料理にするためにはタマネギやトマトも用いる。ときにはジャガイモやナスなどを入れることもある。

「シチュー」はこれらの肉類にやはり塩と唐辛子をふってタマネギなどを入れて炒める。刻んだトマトを入れることもある。とろ火で水分がなくなるまで煮続ける。

9.10 特別な日

どんな日にそうした特別料理を食べるのか（Q37、複数回答）。この質問に対してもっとも多かった回答は「クリスマス」で、203戸（69.76%）、ついで「イースター」112戸（38.49%）、「その他（冠婚葬祭など）」49戸（22.37%）、「日曜日」35戸（15.98%）、「祭日、年中行事に当たる日」22戸（10.05%）、「イスラム行事（ラマダンなど）」7戸（3.20%）、「不明」8戸（3.65%）であった。ガーナ南部はキリスト教の影響が強く、「クリスマス」や「イースター」がご馳走を食べる日となっている。

10 衛生状況

10.1 便所の有無

伝統的には農村地方では屋内に便所を設けることはなく、屋外のブッシュの片隅が排便の場所として利用されてきた。アコラボ村の場合、村のはずれに大きな長方形の堀が作られていて、そこに数本の梁をわたした共同便所がある。利用する人は2本の梁に足場をきめ、和式のやり方で用をたす。学校や役場や診療所などの公共施設には、セメントで作った便所が設置されている。つくりはほぼ和式と同じである。また、家並みが立て込んでいる地区では、数件の



写真8 村の外れにある共同便所

家が利用する、いわゆる共同便所が設置されている。

今回の調査では「家の中に便所がありますか」という質問をおこなった。その結果「ない」という回答が260戸（89.34%）で、約9割の家が自分の家の中に便所を持っていない。「屋内に便所がある」家は27戸（9.27%）にすぎず、「便所

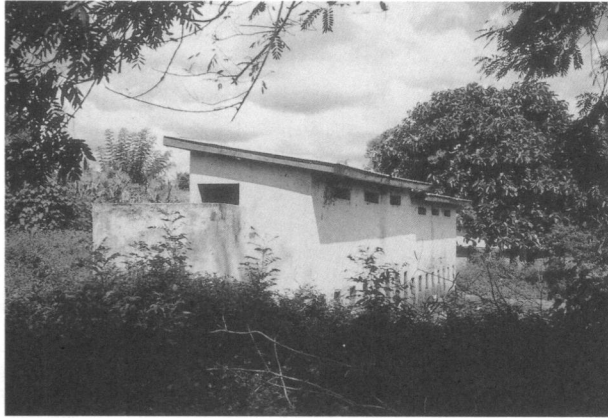


写真9 小学校の便所

はないが、持ち運び便器（日本でいうおまる）がある」家が2戸（0.68%）であった。

村内の便所等の設備については、巡回して調査をおこない、おおよそ把握していたが、家に便所がない家260戸について「排便する場所」をたずねてみた（Q39、複数回答）。もっとも多かったのが「パブリック・トイレット」であり、235戸（90.38%）、これはほぼ「公衆便所」や「共同便所」をさしていると考えられる。ついで、「ブッシュ」が30戸（11.54%）、「地面の穴」が25戸（9.62%）であった。つまり、個人的に屋内に便所を持っている家は1割にも達せず、ほとんどが「公衆便所」や「共同便所」または「ブッシュ」を利用しており、下痢症対策を考えるとき、こうした便所の衛生管理が村の重要な課題のひとつといえる。学校にはグランドの脇に便所が設置されていたが、汚れており、やはり衛生的に問題があった。

10.2 用便後の手洗い

ついで「用便後、手を洗いますか」という質問（Q40）をおこなった。「洗う」が188戸（64.60%）、「洗わない」が92戸（31.61%）、「たまに洗う」が3戸（1.03%）、「不明」が8戸（2.74%）であった。アコラボ村は井戸水、川水、貯水した雨水など、水には恵まれており、用便の際、空き缶



写真10 村では夕方、バケツ一杯の水で母親が子供の身体を洗ってやる風景がしばしば見られる。

などに水を入れて持参することが可能である。したがって用便後に「手を洗う」ものが6割を超えたわけである。手を洗う水がないため、下痢や寄生虫による病気にかかるアフリカの多くの村にくらべてオコラボは手洗いに水が使える村である。

さらに「手を洗うとき石鹸を使うか」をたずねてみた(Q41)。「石鹸を使う」が133戸(45.70%)で、「石鹸は使わない、水のみ」が125戸(42.95%)であった。当時、市販の石鹸はスーパーなどで入手しがたい状況にあったが、「石鹸を使って手を洗う」家が4割5分強もあった。ただし、石鹸といっても、どんな石鹸かは調査されていないので、もしかすると、代用品かもしれない。

10.3 下痢症の頻度

さて、この村の人びとはどのくらいの頻度で下痢を経験しているのだろうか。1か月間の頻度でたずねてみた(Q42)。「1か月に1度も下痢にかかったことがない」と回答した家が179戸(61.50%)で、この村では、それほど頻繁に下痢症を起こしているわけではないようである。しかし、「月に1~2回は下痢になる」53戸(18.21%)、「月に3~4回は下痢になる」18戸(6.19%)、「月に5~6回は下痢になる」4戸(1.37%)という回答をえた。これらの4回答を「1か月に何回か下痢症になるもの」としてまとめてみると、75戸(25.78%)になり、この村の4人に1人は月に1~6回は下痢をおこしていることになる。ところでこの村は、月に約20回と「しょっちゅう下痢をするもの」が2戸(0.69%)あり、病状を訴えていたが正確な病因(たぶん細菌性と推察されるが)は不明である。これに対し「下痢になることはあるが、めったにならない(年4回以下)」が20戸(6.87%)、「ときどき下痢になる(2か月に1回程度)」が8戸(2.75%)と比較的下痢症になる頻度は低いいえが28戸(9.62%)ある。「食べ過ぎたとき、飲みすぎたとき」に下痢になると、自分で原因がわかっているものが3戸(1.03%)あった。

11 近代化の状況

11.1 移動と運搬の手段

村人が村外に移動する場合、もっとも多く利用されているのは「自動車」である。だがこの村で「車を持っている世帯主」は7戸(2.40%)で、車種は「ローリー(トラック)」や「ピックアップ」といった主として運搬用の車を人間の運搬にも用いている。都市間を結ぶ「乗り合いバス」もあるが、当時はガソリン不足で頻繁に動いてはいなかった。

ところで、意外だったのが「自転車」の普及の割合で、この村では「自転車」の所有者は4戸(1.37%)にすぎなかった。

11.2 時計

つぎに「時計」を所有している割合を調べてみると、「持っている」世帯主が172名(59.10%)で、6割に近い人々が時計を持っており、「持っていない」世帯主が118名(40.54%)であった。この場合の時計とは「腕時計」のことで、腕時計を持っていることが一種のステータス・シンボルであり、私たちの観察では、時計が正確な時刻を示すことにはあまりこだわってはいないようにみえた。

11.3 ラジオ

「ラジオ」もまた、アフリカ人が所有にこだわる持ち物のひとつである。しかし、この村では時計よりラジオを持っている人は少なく、「ラジオ」のある家は124戸(42.61%)で、4割強であった。「ラジオを持っていない」家は167戸(57.38%)で、ラジオの普及度はあまり高くない。

11.4 テープレコーダー

電化製品の中でも「テープレコーダー」になると、普及度はきわめて低く、「持っている」人は28戸(9.62%)にすぎない。ラジオよりも高価な品物には違いないが、当時は経済悪化の一途をたどっていた時代で、テープレコーダの入手はきわめて困難だったことも関係していると考えられる。

12 宗教

この村における初期のミッションの活動に関しては、すでに概況のところ述べてが、現在、この村における各宗教の信者の割合がどのようになっているか調査(Q47)をおこなった。その結果、第1位が「プロテスタント」で155戸(53.26%)であった。この「プロテスタント」と回答したものを宗派別にみると「英国国教会(Anglican)」「長老派教会パーゼル派(Basel-Presbyterian)」「メノー派教会(Mennonite)」「メソジスト派教会(Methodist)」「長老派教会(Presbyterian)」「救世軍(Salvation Army)」にわかれている。第2位が「伝統宗教」と回答したもので47戸(16.15%)であった。3位が「イスラーム教徒(Moslem)」で22戸(7.56%)、4位が「新興キリスト教」で18戸(6.18%)、その中は「エホバの証人(Jehovah's Witnesses)や「ペンテコスト(Pentecost)」等である。5位が「アフリカの新興キリスト教徒」で18戸(6.18%)。その中を宗派別にみると「Spiritual Church」「Apostolic」「Bethany」「Brother Lawson」「Divine Healer Church」である。6位の「カソリック(Catholic)」は14戸(4.81%)で、宗派としては「ローマン・カソリック」が大半である。その他「仏教徒」が3戸(1.03%)あるが、これは日蓮正宗(創価学会)である。また「ブドゥー教」が2戸(0.68%)で、宗教団体として不明な回答が8戸

(2.74%) であった。その中には「A.M.E.Zion」「M.D.C.L」等であった。

13 疾病

「罹病したら怖い」と考えている病気の種類について尋ねてみた (Q48, 複数回答)。ただし回答は明確な病名をあげたものと、単に症状を述べたものがある。症状からではどんな病気か病気の種類までは判断できない。やむなく回答のまま、病名と症状を区別せずに集計をおこなった。

まず、もっとも怖いと思われる病気は、各種「熱病 (fever)」である。98戸 (33.68%) がこの病気をあげた。周知のように、ガーナは黄熱病 (yellow fever) の研究に行った野口英世博士がみずからその病気にかかり、一命を落としたところである。回答者の中には明確に「怖い病気は黄熱病」と回答したものが11戸 (3.78%) あり、「熱病」と「黄熱病」を加えると「熱病」が109戸 (37.46%) に達する。つまり、各種「熱病」がアフリカではもっとも怖ろしい病気と考えられている。ついで、「腹痛 (stomach ache)」をあげたものが22戸 (7.56%) あった。しかし、「なぜ腹痛が起こったのか」の病因についての知識は乏しく、それが「腸チフス」, 「食中毒」, 「虫垂炎」などのどれをさしているのかは、この調査では明らかにできなかった。しかし、「腹痛」を起こす病気が怖い病気のカテゴリーの上位にランクされていた。3位が「コレラ (cholera)」で21戸 (7.22%), 4位が「結核 (tuberculosis)」で17戸 (5.84%), 5位が「ハンセン病 (leprosy)」が15戸 (5.15%) である。6位に「眼病 (eye disease)」があげられているが、この場合も病因が「トラフォーム」, 「結膜炎」, 「白内障」, 「緑内障」など色々考えられるが、病因を特定することはできなかった。7位は「黄熱病」11戸 (3.78%) だが、これはすでに「熱病」のところで述べた。8位の「失明 (blindness)」はおそらくアフリカの風土病である「流水中に棲んでいる昆虫 (ブユ) による感染症」のことをさしていると思われる。川の中に生息する回旋糸状虫 (*Onchocerca volvulus*) を媒介にして失明する。この眼病をあげたものが10戸 (3.44%) あり、これに6位の「眼病」を加えると22戸 (10.00%) になる。また、話は前後するが、6位に「頭痛 (head ache)」をあげたものが10戸 (3.44%) あるが、これは症状をあげただけで「なぜ頭痛が起こるのか」病因は不明である。怖ろしいというからは単なる頭痛というよりは「脳出血」などの脳関係の病気を意味しているのかもしれない。

以下、順次調査に出現した「病名」をあげると、「脱腸 (hernia)」が9戸 (3.10%) で、アフリカでは一般に手術を受けられず、子供たちが脱腸のまま放置されているのをよくみる。「できもの (boils)」8戸 (2.75%), 「はしか (measles)」8戸 (2.75%), 「喘息 (asthma)」8戸 (2.75%), 「腰痛 (waist pains)」8戸 (2.75%), 「心臓病 (heart attack)」7戸 (2.41%), 「黄疸 (jaundice)」が5戸 (1.70%), これも病名ではない。肝臓や胆道の病気の

ときに目立つ症状である。「血尿 (blood in urine)」が4戸 (1.37%)、この症状から考えられる病気は腎炎、膀胱癌等々である。「ひきつけ (convulsion)」が4戸 (1.37%)、「下痢 (diarrhea)」が4戸 (1.37%) である。「その他」が27戸 (9.28%) もあるが、これは呪術、邪術等によってひきおこされた病気をもっとも怖いと答えた者で、現象としては、いわゆる「精神疾患」をあげた者、「悪霊」にとりつかれて「たたり」を受けること等が含まれている。なお、「不明」が20戸 (6.87%)、「無回答」が11戸 (3.78%) であった。

このプロジェクトの主なる目的は、下痢症の発生原因を追究することにあるが、住民は「下痢」をそれほど怖いこととは考えていないようである。

14 居住と扶養

居住に関する調査は、13の婚姻状況にくわえて夫婦が同居しているかどうかを確認するためにおこなわれた。食事や飲料水、および衛生状況などが良好に維持されるには、女性(妻)の役割が大きいからである。「あなたは妻(または夫)と一緒に住んでいますか」(Q49)の質問に対し「一緒に住んでいる」が126戸 (43.29%)、「一人の妻だけ一緒に、他の妻たちは離れて住んでいる」が92戸 (31.61%)、「一緒に住んでいない」が60戸 (20.61%)、「目下、妻(または夫)はいない(離婚、寡婦、独身等々)」が6戸 (2.06%)、無回答7戸 (2.40%) であった。

14.1 扶養家族

家族については、すでに14の家族の規模の項目で若干言及したが、この質問(Q50)はガーナ側の要請で付加されたものである。「扶養」とは、一言で言えば「助け養うこと」であるが、アフリカの場合はエンゲル係数が高く、質問は「あなたが家族を食べさせていますか」となった。結果は、当然のことながら世帯主が「家族を食べさせている」がもっとも多く230戸 (79.03%) で約8割に達した。これに対し「食べさせていない」が51戸 (17.52%) で無回答が10戸 (3.43%) であった。

それでは世帯主は家族を食べさせるのに1日どのくらいのお金をかけているのだろうか(Q51)。もっとも多かったのが「1日40~49セディ」で54戸 (18.55%)、ついで「1日20~29セディ」が50戸 (17.18%)、以下「1日60~79セディ」が45戸 (15.46%)、「1日30~39セディ」が42戸 (14.48%)、「1日50~59セディ」が39戸 (13.40%) であった。これらをまとめると、家族の食費に「1日20~79セディ」かけている世帯主が230戸 (79.03%) で、この場合家族構成を考慮しなければならないが、この村の一般的な世帯では通常これくらいの食費がかかっていると推定される。

これに対し、食費に100セディ以上かけている世帯は34戸 (11.68%) あり、こうした世帯の家が豊かな食生活をしているのか、はたまた大家族のため多くの食費がかかっているのか、

るのか、どちらであるのかは今回の調査では分析はできなかった。

逆に「1日10～19セディ」あるいは「1日10セディ未満」の世帯が21戸（5.49%）あった。1つの容器で「共食」の習慣があるアフリカの社会においても、こうしたほとんど食費をかけていない世帯はいったいどこで食事をしているのだろうか。子供がいる世帯はどうしたって食費にお金がかかるはずである。そこで「あなたは子供と一緒に住んでいますか」という質問（Q52）を追加した。結果は「一緒に住んでいる」が185戸（63.57%）、「一緒に住んでいない」が86戸（29.55%）であった。なぜ質問50で「家族を食べさせている世帯主」が約8割あるのに、「子供と一緒に住んでいる世帯主」は6割3分強しか存在しないのだろうか。

すでに家族構成の調査において、「男1人世帯」が54戸、「女1人世帯」が18戸「夫婦のみ」が8戸、「男同士の共住」が1戸、「女同士の共住」が1戸で、「子供のいない世帯」は合わせて82戸あり、質問50の結果はこれと一致する。つまり「子供のいない世帯」は「夫婦のみの世帯」を除くと、どこかで寄食していると推定されるのである。

14.2 居住形態

質問51（Q53）では、婚姻に伴う居住形態について調査をおこなった。もっとも多かったのが「新居住（neo-local）」で169戸（58.07%）である。夫方、妻方の双方の親から独立して家をもったものである。つぎは「母方居住（matri-local）」で45戸（15.46%）、ガーナにはいくつかの母系社会がある。花婿が花嫁の親の家か、あるいはその近くに住んだ場合である。「父方居住（patri-local）」が20戸（6.87%）で、これはいわゆる嫁入りで、花嫁が花婿の親の家か、あるいはその近くに住んだ場合である。また、「1人暮らし」や「単身者同士の借家（借り部屋住まい）」が12戸（4.12%）、「おじ方居住（avuncu-local）」が2戸（0.68%）、「兄弟の家に居住」が2戸（0.68%）であった。しかし、この範疇に入らず、居住形態を明らかにしなかった世帯主が41戸（14.08%）あった。

15 食用野菜

この質問は質問5の食事調査に加えてガーナ側から追加された項目である。この地方で食べられている野菜の種類を調査するのが目的であった（Q54、複数回答）。圧倒的に食事に採り入れられている野菜は「コントムレ」で256戸（87.97%）であった。すなわち、この地方では野菜といえば「コントムレ」というほど食用にされている。「コントムレ」はすでに述べたが、サトイモの葉を料理した副食である。これに比べると、2位の「ガーデン・エッグス」は119戸（40.89%）、「オクラ」もよく食べられている野菜であるが110戸（37.80%）であった。「トマト」は高級な野菜とされており、食べている家は67戸（23.02%）、同様に「玉ねぎ」も45戸（15.46%）であった。以下、「ベッパー」が33戸

(11.34%), 「豆類」が24戸 (8.25%), その他、野菜の種類は同定されていないが、「エファン (efan)」が12戸 (4.12%), 「ニヤデワ (nyadewa)」が11戸 (3.79%), 「パームオイル (palm oil)」が9戸 (3.09%), 「ボコドコ (bokodoko)」が9戸 (3.09%) であった。

16 胃腸病

16.1 胃腸病の治療行動

いわゆる「食べすぎ」, 「飲みすぎ」, 「胃のもたれ」といった一般的に胃腸の調子の悪いとき, どのように治療するかという質問 (Q55) に対し, 「薬草などを使って自分でなんとかする」が137戸 (47.07%), 「病院などへ行って治療してもらおう」が120戸 (41.23%), 「胃腸を壊すことはない」が30戸 (10.30%), 「無回答」が4戸 (1.37%) であった。これは, 慢性的な胃腸病に関する治療行動を調査しようとしたものだが, 質問紙調査法の欠陥で, 結果は「自家療法」が「近代療法」を若干上回るというまとめ方しかできなかった。

16.2 民間胃腸薬

実は, ガーナ側としては質問55 (Q55) は質問56 (Q56) の回答を導き出すために用意されたもので, もし, 胃腸病の治療に薬草を使っているとすれば, 「どんな薬草を使っているのか」聞き出すのが目的であった。しかし, 「薬草などを使って自分でなんとかする」と回答したのも, 伝統的な治療師 (healer) や薬草医 (herbalist) から民間医薬を入手しているが, その薬草名を知っているものは少ない。

回答者のうち (Q56, 複数回答) 142戸 (48.80%) は「薬草名は知らない」といい, 54戸 (18.56%) は「不明」, つまり知っているが明らかにしなかった。治療に使用した薬として明らかにされたものは, 「Ocimum viride」が43戸 (14.78%) このシソ科の植物メボウキは頭痛に有効といわれている。「Epsom salt」が9戸 (3.09%) 瀉利塩で下剤として用いる。「Zingiber officinale」が7戸 (2.41%) このショウガ科の多年草は健胃剤, 鎮嘔剤とされている。「Justicia flava」が7戸 (2.41%) これはキツネノマゴ科の植物で, 下熱剤として用いられている。「Alstonia boonei」が6戸 (2.06%) これはキョウチクトウ科の植物でリュウマチ痛の治療に使われている。「Capsicum frutescens」が6戸 (2.06%) ナス科の植物のトウガラシのこと, 「Khaya grandifoliola and Khaya ivorensis」が4戸 (1.37%) これはセンダン科の植物の胃腸薬だという。「Altenanthera repen」が3戸 (1.03%) これはヒユ科の植物と同定された。「Citrus medica var. acidia」が3戸 (1.03%) ミカン科シトロン類が使用されている。「Terremycine」が3戸 (1.03%) テラマイシンが使用されている。「Rawolfia vomitoria」が2戸 (0.69%) でキョウチクトウ科, インドジャボク属の植物が胃腸薬として使用されていた。

以上, ガーナ側から付加された設問は, 必ずしも目的にかなう結果は得られなかった。つまり, 1977年ごろからアメリカで癌研究をおこなっている人びとがアフリカの薬草に

興味を持ってアフリカ各地を調査して歩いていた。新しい民間治療薬がないかと探していたため、現地の人々は薬草に関しては極めて警戒する反応を示していた。

また、次の質問57 (Q57) もガーナ側から追加されたもので、日本側からすれば蛇足に感じられた。すなわち、その質問は「伝統的な治療師のところに行ったときにもらった薬草名」を尋ねたわけだが、「行ったことがない」と回答したものが282戸 (96.90%) もあった。しかし、情報提供者 (インフォーマント) の話では、治療師のところでは治療を受けているものが結構いるようで、「行ったことがある」と回答したものが4人しかいないのは正直な回答をしていないと思われるのである。

17 食餌療法

17.1 下痢の場合

下痢の際にガーナ人は何か食餌療法をおこなっているのだろうか。質問58 (Q58複数、回答) では「あなたは頻繁にトイレに駆け込まなければならないような激しい下痢に襲われたとき、どのような食事をとりますか」と尋ねてみた。回答の結果は「特になし」が136戸 (46.73%) で、この村では特に民間の食餌療法が発達しないようである。ただし、この回答の中には「病院へ行って指示を仰ぐ」「何も食べない」あるいは「普段の食事を与えるだけ」などが含まれている。

ところで、この質問に「不明」つまり「妻が何かつくって与えているようだが何かわからない」と回答したものが50戸 (17.18%)、「回答しなかったもの」が13戸 (4.46%) あった。あわせてみると63戸 (21.65%) になった。その理由を推察すると、伝統的な食餌療法があっても、近代医学に反すると思われるのを警戒し回答を拒否した可能性がある。この種の調査の回答を質問紙で得るのは難しい面があるのを実感した。

なお、下痢の場合の食材として2種以上をあげた者には、材料Ⅱ、Ⅲ、Ⅳとして記録し、同時にその調理法についても統計をとってみた。その結果、まず、普段とあまり変りのない食事をとっていると答えているが、その内、米や粥のような食餌をとりはじめるようになり、下痢の際の食餌療法になっているように推察される。

17.2 便秘の場合

便秘についても尋ねてみた (Q59)。すなわち「便秘になった時に何を食べますか」と質問をおこなった。結果は下痢の場合とほとんど同じで「特になし」が97戸 (33.33%) でもっとも多い。その内容は「いつもと同じものを食べる」あるいは「何も食べない」といった回答が目立つが、その他にはひどくなれば「病院に行く」という回答もあった。

ついで、「何を食べたか覚えていない」などの不明が38戸 (13.05%)、「便秘の経験がない」が32戸 (10.99%) であった。便秘の際に食べるものとしては「食用バナナ」が19戸 (6.52%)、「料理用バナナ」が16戸 (5.49%) でバナナ類が使われているようだ。



ガーナ東部州で主要な食料になっているヤマイモとプランティン・バナナ。2人の少女がそれ等を鶏と一緒に頭上運搬し、近くのマーケットへ売りに行くところ。



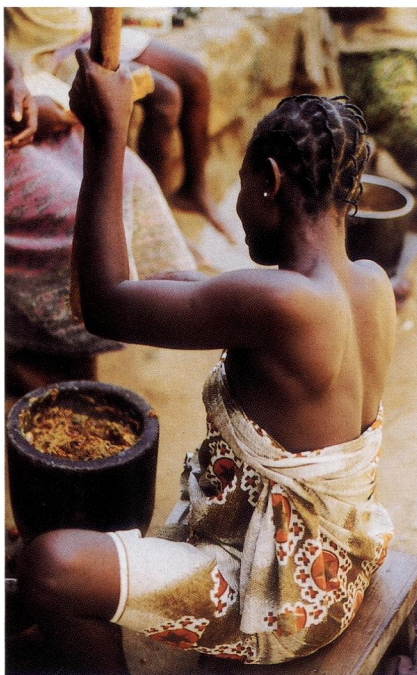
スラム地方で買付けられた商品作物はローリー（トラック）で州都コホリドアや首都アクラのマーケットへ運ばれていく。



ココア（カカオ）の実，東部州はかつてココアの主産地であった。しかし「枝腫病」の発生により，現在はアシヤンティ州が最大のココア生産地になり，この村のココア農園は縮小した。



アブラヤシの実，副食となるスープの基本的な味付け材料になる。



アブラヤシの実を臼に入れて、堅杵でよく搗く。搗いた実をナベに入れ、水を加え、濾し器で液と果肉カスや種に分ける。



イモ類（ヤムやキャッサバ等）の皮をむき、よく煮る。煮あがるとイモをとり出し、臼に入れ堅杵でよく搗く。これは主食の「フフ」である。



マーケットの露店食堂などでは「フフ」と「肉（グラス・カッター等）スープ」を土器にもって売っている。



この村では土器を製作するのは女性たちの仕事で、紐作りの技法で成形していく。



アブラヤシの葉柄は小葉を取り去り、籠編みの材料になる。籠を作るのは少年たちで、マーケットで売って小遣稼ぎをする。



土器の焼成。コンパウンドの背後の空地で野焼きの方法でおこなわれる。堀、窪めた地面に土器をならべ、乾燥した草をかぶせ、様々な廃材でかこい、点火する。